

---

# 夢遊び尽くす死神

トンネル道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢遊び尽くす死神

### 【Nコード】

N2425V

### 【作者名】

トンネル道

### 【あらすじ】

主人公は厨二病 それを原動力に2次元他作品の技を執念でいくつか会得 見た目は女で魂は男だがやや女 最強キャラだが、一番強いという意味の最強ではない やや無自覚だが男女問わずモテる この作品を読む場合、ムシウタbugシリーズを先に読む事を薦める。明らかなパクリ部分があるから。だが後悔は多分しない！！

最後に、これは俺が文字通りの暇潰しと気紛れ、気分転換に創ったやつだから、過剰に期待はしないように注意

## 天才ルーキー（前書き）

まあ見てっ  
てくれや

天才ルーキー

〈海燕〉

「どうぞ／＼」

「うん、ありがとう」

「おつ、サンキュ」

茶を持ってきてくれた女性の死神に礼を言い、それを口元に持つてきてすすする。

ズウゝ・・・

あゝ茶がうめえゝ

「それで考えてくれたかい？」

はあゝやっぱこの話が来たかあゝ（――）

「もっかい言いますけど、俺は副隊長なんてやりませんからね」

「もっかい言うなよ・・・」

残念さが増すじゃないか・・・（^―^；）

「俺より先に隊長格に入るべき人なんていくらでもありますって」

「義理立てか・・・」

まあそれも君らしいところだ  
・・・あつ、ところで聞いたかい？」

隊長が突然何かを思い出したように話題を振ってきた。

「何すか？」

「今年の新人隊員に君以来の天才がいるそうだよ、それも“二人”も」

「俺は天才じゃないつすよ・・・（苦笑）」

「その子たちは、たった一年で「真央霊術院」を卒業したそうだし」

ん？何？

「一年・・・！そりやまたすごいっすねー」

「そうだろう」

そして、その内の一人の少女は、前にも話した「京楽」が琉魂街から連れてきたあの子のことだ

この間、京楽と飲み連れて行かれた時、この事を自慢話に聞かされてね」

「ああ・・・俺もその子については直接会ったことはないっすけど、前に京楽隊長と飲みと言った時、散々親馬鹿ならぬ自慢話を聞かされましたよ・・・」

『知っているかい？僕にはねえ、口は悪いけど可愛い天使がいるんだよ』

という台詞を一言一句変わらず何回も何回もループして聞かされま

した

アレはあの人の酔っ払った時の常套句ですよ（――；）

本当にアレには勘弁して欲しかった。何回も何回も聞かされる身になって欲しい。親馬鹿も大概にしてくれ・・・

「あははは、それは京楽のいつものことだ（笑）」

「で、その天使ちゃんとやらはやっぱり「八番隊」に入隊ですか？」

「ああ、そうだよ

入隊と同時に席官の座も用意しているらしい

あ、これは単なる親馬鹿だけの話じゃないぞ

歴とした実戦を含めた相応の実力あつてのことだ

歳が若いのには少し難はあるが、まあ彼女なら大丈夫だろ」

「へえ・・・そうなるとうー人の天才の片割れもそれに近い実力を持つていることになるなあ・・・

こりゃ俺の副隊長の座もますます遠退くなあ」

（――）

「嬉しそうに言うなよ・・・（――；）」

く俺く

俺が『BLEACH』の世界に転生してから数十年が経ち、今俺

は当初の狙い通り“死神”をやっている。

その経過までは所々を省くが、俺は「京楽春水」を後見人として「護廷十三隊八番隊第三席」をいきなり任されている。でもあまり嬉しい話じゃない。

なぜなら、そのおかげで毎日書類の山、山、山！

初めて知ったよ。席官の仕事は実戦よりもデスクワークの方が遙かに多いって！

前世で『BLEACH』読んでいた頃は、戦闘シーンばかり目が行っていたからこうなるのは予想外だった。

おまけに俺の上司に当たるあの二人は、女の尻追いかけてたり、エロ本読んでたりで、サボって溜まっていた未処理の書類が全部俺に回ってくる。

つーか何だよ、そのムカツクサバタージュ。聞いていて殺したくなるわ！

「つーわけで、俺もサボってまーす

だあゝって、ダルいんだもん（＾３＾）」

書類はまだ未処理なのが三分の二程残っているが、気にしな〜い気にしな〜い（ゝゝゝ）

俺はデスクワークが続き、久しぶりに天井の下ではなく青空の下を歩けることに、一種の感動を覚えながら、俺は“友達”の家に遊びに向かっている。

「おお！相変わらず嫌みなくらい大きな屋敷だこと」

俺は屋敷の門は潜らずに“瞬歩”で塀を飛び越え、屋敷内へ侵入。見覚えのある目的の“霊絡”を辿り、使用人や警備員の死神に見

つかからないよう、極力霊圧と気配を絶ち瞬歩で高速移動。

「はっ ブンッ！」 「ふっ ブンッ！」 「はっ ブンッ！」

おっ、いるいる。木刀でひたすら素振りとは、相変わらず真面目一辺倒な奴だ。そんなのを見ていたら、声をかけて邪魔をするわけにはいかないな。

普通にからかいたくなる（^^）

全神経を使い、瞬歩で気付かれないように横に立ち、そつと耳元にフウッ！ 息を吹いた。このケースを予期して、前もって昼食にニンニク料理もたらふく食べることを忘れない。その匂いを耳元になぞる快感と共に、オプシオンとしてプレゼントフォーユー

「アヒヤッ！／＼／」

普段の彼らしからぬ案外可愛い声が聞こえる、ぷふっ（笑）

「く・・・臭！

貴様ア！！ ブンッ！！」

俺の友達「朽木白哉」が俺の居た位置に木刀を真横に振り抜く。即、瞬歩で回避。

「よおっ、暇だから遊びに来たわ（^^）／」

「毎回毎回私の鍛練の邪魔をしおって・・・（#、皿、）  
今日という今日はもう勘弁ならん！！」

白哉の奴が殺気立って木刀を構えた。



と、その時

「ただ今貴様を成ば　ボイン　っ！／＼／」

白哉の後ろから“褐色のあの人”がいつの間にか現れ、わざとなのか後頭部に結構な乳房が当たっていた。

「今度は貴様が化け猫！！　ブンッ！！」

白哉は俺の時と同じ対応で真横に剣を振るうが、あの人は一瞬歩すらせずにかわし、大胆不敵な笑みを浮かべた。

「化け猫とは随分なご挨拶じゃのう、白哉坊！

折角そこにおける「遊子」と同じく遊びに来てやったというに！」

塀の上に「夜一」さんが威風堂々と立つ。

「黙れ！

私がいつ貴様らに遊びに来て欲しいと言った！？

そもそも朽木家次期当主たる私に遊びなど不要だ！！」

「そうかのう？」

夜一さんがまた瞬歩で白哉の後ろに移動し、結わえていた髪紐を解かれ奪われた。

それにしても流石は【瞬神】。移動した軌跡が微かにしか見えなかった。それでも本調子の瞬歩ではないのだろう。

「貴様あ！！！」

白哉が剣を飽きずに振るうが、直情的な軌跡は夜一さんにあっさり見切られ、瞬歩でまた元の位置へ戻った。

「ふははははは!!」

お遊びとは言え、これでは朽木家の将来が思いやられるのう!」

「・・・そこを動くなよ四楓院夜一・・・

今から私の瞬歩で「膝カックン」オワッ!!」

俺は隙について瞬歩で白哉の背後を取り、両膝で内膝を押してやった。

「ふははははは!!」

おなごである我らにこうもあしらわれるとは、まっことに朽木家の将来が不安じゃのう!」

夜一さんの口調を真似て、尻餅について怒りに震える白哉に告げた。

瞬間、夜一さんと目が合い、トドメの台詞を吐くことにする。

「「朽木白哉!敗れたり!! ザンツ!!」」

直ぐ様、俺たちは瞬歩で退避。

またな〜白哉!暇があつたらまた遊びに来るわー

。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうか・・・

余程私の怒りを買いたいと見える・・・

よかるう・・・ならば身を以て知るがいい!!

私の瞬歩が、貴様らのそれをとくに超えているということにな!

！  
ドウッ！！  
」

「・・・さて、茶でも飲むか・・・」  
三人共、終始この  
人が居たことに気付いていない（笑）

## 天才ルーキー（後書き）

あー、ちなみにこの作品は処女作だから。温かい目で見て勘弁な。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2425v/>

---

夢遊び尽くす死神

2011年10月8日20時56分発行